九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『捷解新語』の改修 : 原因・理由表現を中心として

申, 忠均
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/9428

出版情報：語文研究. 78, pp.1-10, 1994-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『捷解新語』の改修

――原因・理由表現を中心として――

申　忠　均

一

『捷解新語』は「倭学講習以捷解新語為津筏」と称せられたように、何度も大幅な改修を加えながら、重用された。所謂原刊本の他に、『改修捷解新語』、『重刊改修捷解新語』などの改修本を今日見ることが出来る。[2] この改修について、従来、原刊本は通俗的な言葉で綴られているのに対し、改修本（重刊本を含む）は言葉遣いの点でやや規範性の高い言い回しを取る傾向にあると指摘されている。

その規範性に関わると思われる要素の一つに文章語的な言い回しの増加があり、一見すると改修本と重刊本は口頭語資料としての価値が原刊本より落ちるかにも見える。しかし、はたして一概にそのように言ってよいものかどうか、ここでは原因・理由の表現形式を取り上げて、改修と口頭語との関連について少しばかり考えてみたいと思う。

二

原刊本の巻九の冒頭は次のように始まっている。[3]

①此の頃は館中も徒然に御座るホドニ、笑いの種にも、廻し振舞いをしたいと思うが如何御座るか。

さてさて最う好う御座る。此方から先に申すと思うて御座れども、御話の序遅れまるしたに、斯う仰しらるホドニ、我等心中が相届けかと、猶目出たう御座る。

然う仰しらるホドニ、忝なう御座れども、②とかく我等が申し出いた事ぢゃホドニ、③明日より我等がしまるせうホドニ、各々も左様に心得さしられ。

この部分を改修本に求めると、次のようになっている。

①′此の頃は館内も徒然に御座りまするニヨリ、代わる〳〵に振舞いをして慰みたう御座りまするが如何御座りませうか

さてさて最う好う御座りませう。此方より先に申そうと思うて居ましたに、御話致して居ましたユエ遅れましたに、斯様に仰せらるるニヨリ、我々心差が相届きましたか、猶目出たう御座りまする。

左様に仰せられまして忝なう御座れども、②′とかく我々が申し

た事で御座るユエ、③′明日より我々が始めませうホドニ、各々も然様に御心得なされませい。

原刊本と改修本の巻九の冒頭部を対照しながら一読すると、原因・理由の表現形式と思われるものに幾種類かの変化があることが注目される。第一句が、原刊本では①「徒然に御座るホドニ」であったのが、改修本では①′「徒然に御座りまするニヨリ」のように、ホドニからニヨリに直されたかと思えば、③「明日より我等がしませうホドニ」は改修本では③′「明日より我々が始めませうホドニ」とホドニがそのまま踏襲されている。一方、②「とかく我等が申し出いた事ぢゃホドニ」から②′「とかく我等が申したこと事で御座るユエ」とユエに改められている句もある。原刊本では全てホドニという表現形式を採っていたこれらに別々の改修が為されていることになるが、以下この問題について考えてみたい。

まず、巻九の冒頭部のような原因・理由の表現形式の改修が『捷解新語』全体に連なる事柄であるかどうかを確認する必要があるだろう。次の表一）を参照されたい。(4)

表一）

重刊本	改修本	原刊本	
6	17	11	已然形＋バ
89	142	259	ホドニ
36	47	6	ユエ
43	55	0	ニヨリ
6	12	5	カラ
15	18	18	アイダ
93	122	106	テ
288	413	405	計

表一）から、原因・理由の表現形式において著しい変化を見せているのは、ホドニ、ユエ、ニヨリの三者に係わるものであることがわかり、しかも、原刊本から改修本にかけて、ホドニは一二〇例ほど減っているのに対し、ユエ・ニヨリがその分増えていることも読みとれる。現に、二五九例あった原刊本のホドニのうち、一四〇例が改修本に残存し、四一例はニヨリに改められており、三一例はユエに置き換えられているのである。この三者の数の増減から、右に挙げた巻九の冒頭部のような改修がそこだけに限られたものではなく、全巻に通じて一貫する改修であることがわかる。

要するに、『捷解新語』の原刊本から改修本にかけての原因・理由の表現形式の改修には㋑ホドニの踏襲、㋺ホドニからユエへの置き換え、㋩ホドニからニヨリへの改めという三つのパターンがあるこ

とに要約出来ることになるが、以下、この三つのパターンが併存することについて考えてみたい。

以前濱田敦氏は原刊『捷解新語』のホドニの多くが改修本ではニヨリに改められ、原刊本には極めて希であったユエが改修本では著しく増加していることなどを指摘されて、そのうちのニヨリについて、次のように説かれたことがある。[5]

この様に「ほどに」が減少し、「により」が増加するという傾向は、（中略）それは一種の文語的表現と云うべきものであるが、同時に、『改修捷解新語』などによって代表される「さやうしかれば」的文体に属するものとも云えるであろう。

なお、同様なことがユエについても言えるかと思われる。当時の諸口頭語資料や、原刊本での用例などからユエは口頭語ではなく文章語であったことがわかるが、[6]そのユエが「さやうしかれば」的文体の中に違和感なく、しかも相当の数で現れていることなどから、右記の濱田氏の指摘はニヨリだけではなく、ユエにも該当するものと言ってよかろう。

結局、原刊本のホドニから改修本のニヨリ、ユエへの改修は「口頭語から文語的表現へ」という改修態度によるものだということを窺知する事が出来る。[7]

三―一

原因・理由の表現形式に係わる改修の態度に「口頭語から文語的表現へ」があって、その結果改修本が文章語的性格を増してきたのは右の通りであるが、未だ、依然として残る問題がある。唯単に「口頭語から文語的表現へ」という意識だけが改修の要因として働いたとしたら、原刊本の全てのホドニを改修本のニヨリかユエの一方に置き換えれば良かったはずであるが、改修本の状況はそうではない。つまり、どういう性格のホドニがそのまま踏襲され、またニヨリ・ユエに替えられたホドニにはどういう特徴があるかというのが残っている問題である。

原刊本のホドニの改修本での残存と置き換えの併存は一体何を表しているのだろうか。この問題に関しては改修を経た結果の改修本での三者の現れ方を分析することによってはじめて答えが得られるだろう。それで、改修本に残存しているホドニと、ニヨリとユエに置き換えられている非ホドニとに分けて考察を進めていくことにする。

事新しく言うまでもなく、接続表現形式は前件と後件を繋ぎ合わせる機能を持っており、その前件と後件が表現形式の選択に影響を及ぼすと思われるので、これに着目し、表現形式の上接語と後件文の内容という観点から改修本のホドニと非ホドニを見てみることにする。

先ず、上接語のことであるが、前掲用例③や、次の

④封進物を請取りませうホドニ、然様に御心得なされて御出なされませい。（改、巻二、二一）

⑤程なく、返事が参りませうホドニ、然う心得なされまし…（改、巻五、九）

のように、ホドニの上接語にある特徴が見受けられる。そこで、ホドニと非ホドニがそれぞれ受ける上接語を調べてみると、次の表二）のようになる。

表二）

非ホドニ	ホドニ	
35	28	動詞
1	3	形容詞
24	19	マスル
1	3	ルル
0	1	ナイ
0	3	マイ
15	9	ヌ
0	8	ヂャ
21	19	タ
4	49	ウ
3	0	名詞
104	142	計

右の表からは、ホドニと推量・意志の助動詞ウの間に強い対応関係があることが浮かび上がってくるかと思われる。助動詞ウに下接する五三例のうち、四九例（約九二％）がホドニによって後件と結ばれている。尚、この「助動詞ウ＋ホドニ」の数は改修本の一四二例のホドニの三分の一に当たるものでもあって、原因・理由の表現形式としてのホドニと推量・意志の助動詞ウとの密接さを物語っているように思われる。

又、推量・意志の助動詞という点では否定のマイの場合も同じであるが、

⑥別の事も御座るまいホドニ、明日御覧なされませい。（改、巻一、二三）

⑦今度居取っても例には成りまするまいホドニ、居取ってゆるりと語りませう。（改、巻三、一〇）

のように、改修本におけるマイの三例も全てホドニを受けていることもあって、前件が推量・意志の場合はホドニを採るというパターンが認められるかと思われる。

一方、右に挙げた④から⑦までの四例の後件文は、三例が命令、一例が依頼という内容のものであるが、[8] ホドニの後件文の意味内容にも目立つところがある。表三）を参照されたい。

表三）

計	非ホドニ	ホドニ	
44	23	21	推量・見解
28	14	14	意　志
101	26	75	命令・依頼
2	1	1	疑　問
54	35	19	事実の叙述
17	5	12	そ の 他
246	104	142	計

表三）からは一四二例のうち五三％に当たる七五例のホドニの後件文が命令・依頼の内容であることがわかるが、この七五例の「ホドニ＋命令・依頼文」は、「非ホドニ＋命令・依頼文」の約三倍にも及ぶ数である。つまり、後件文の内容が命令・依頼の場合は、表現形式として非ホドニよりはホドニを以って現れる傾向が改修本に

あったことが見受けられる。

右の二点、つまり上接語に推量・意志の助動詞が多いことと後件文に命令・依頼文が多いこととは相反するものではなく、用例④から⑦までのように、軌を一にすることも看過できないことは言うまでもない。[9]

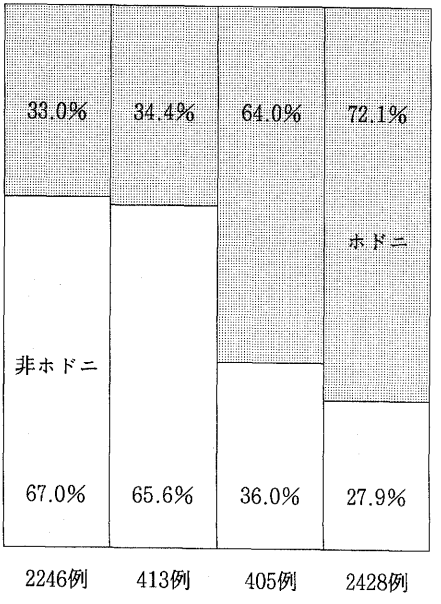
さて、右に述べてきた改修本におけるホドニの傾向―ホドニが推量・意志の助動詞と結び付くことの多いことと、命令・依頼の後件文と呼応することの多いこと―は、日本語史の中でどう位置づけできるだろうか。概ね『捷解新語』と同じ時期に書写された大蔵流狂言台本に見られる、小林千草氏の、次の

ホドニは、虎明本（虎清本）から虎寛本にかけて勢力を失っていったが、上接語が（ハ）推量・希望を表わす助動詞群の場合と、後件が（d）命令（e）依頼の場合には、ニョッテを抑える力を保有していた。[10]

の指摘と、『捷解新語』におけるホドニの傾向とは一脈相通ずるものかと思われる。

また、資料の性格や細かなところでの違いが存することなどもあって、一概には言えないが、原因・理由の表現形式の全体の中からホドニが占める比率も、図一）に見るように、原刊本と虎明本が、改修本と虎寛本がそれぞれ近似値を見せていることも看過出来ない。

図一）



結局、原刊本から改修本にかけての『捷解新語』におけるホドニの変化は、日本語史上の流れをある程度反映するものと認め得るのであった。

三―二

さて、改修の一軸の「ホドニ→ホドニ」が口頭語の反映なら、他方の軸の「ホドニ→非ホドニ」もやはり口頭語の反映でないと、歯車が合わないことになる。故に、「ホドニ→ユエ」と「ホドニ→ニヨリ」の非ホドニタイプの有り様を検討し合わせる必要がある。

ここで、既に挙げた小林氏の指摘をもう一度想い起こしてみよ

う。同氏の指摘を裏返すと、上接語が助動詞ウなどの場合と、後件の内容が命令・依頼の場合以外には、ニョッテがホドニを蚕食して行きつつあったということになる。ホドニの場合で見たように、もしも『捷解新語』が口頭語史における原因・理由表現の流れをそのまま反映しているなら、改修本には非ホドニとしてニョッテが現れているはずである。しかし、改修本に原因・理由の表現形式と思わしきニョッテは一例もない。その代わり、右に見てきたように、ニヨリとユエが増えているが、改修本でのニヨリ・ユエの問題は、結局口頭語におけるニョッテと深く係わっていることが予想される。

非ホドニ、つまりニヨリとユエの上接語を表二）に見ると、推量・意志の助動詞ウとホドニが堅く結ばれているような強い対応関係が見られることはない。但し、ホドニと非ホドニのいずれにも結び付いている動詞、丁寧のマスル、過去・完了のタ、打ち消しのヌなどの助動詞の場合は、これらのそれぞれが非ホドニを受けている数がホドニを採る数より若干上回っていることには注目する必要があるだろう。

また、表三）のように、後件文においては、命令・依頼文とホドニとの密接さが認められたが、その他の推量・意志などの後件文ではホドニと非ホドニがほぼ同じ割合で用いられている。しかし、僅かな差ではあるが、

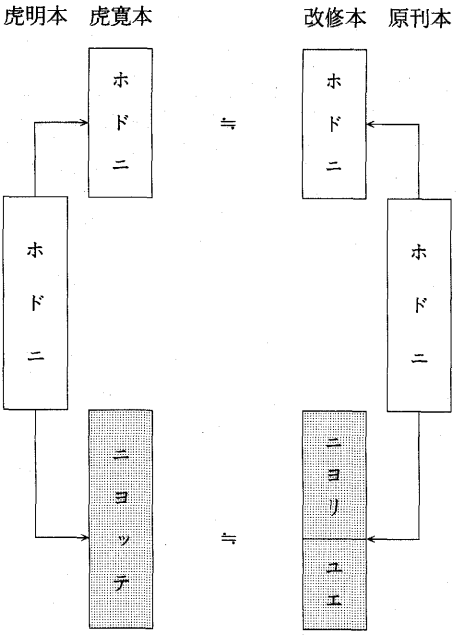
⑧此の程は一円此方へは御座らぬユエ、最う御残り多も御座り、腹も立ちまする。（改、巻二、一八）

⑨対馬を御立ある様にと申しました事で御座るニヨリ、今は自由に差引きが成りません…（改、巻六、一七）

のような、後件文の内容が事実の客観的叙述の場合は三一例（六二％）が非ホドニと結び付いており、一九例（三八％）のホドニを抜いていることは、「ニョッテは、後件が事実の客観的叙述を表す場合から使われ出し」[11]た大蔵流狂言台本の実態もあることから、目を留めておいてよかろう。

こう見てくると、改修本に見られる非ホドニの傾向―命令・依頼以外の内容を持つ後件文と呼応する場合と、助動詞ウ以外の上接語に結び付く場合は、非ホドニがホドニと伯仲するか、やや優位を占める―は、大蔵虎明本から虎寛本にかけてのニョッテの勢力の推移と大同小異であることが注視される。これに、原刊本から改修本にかけてのホドニの勢力減少の諸様相が狂言台本のそれと近似していることも考え合わせると、改修本の非ホドニの右傾向は日本語の口頭語史におけるニョッテの実態をある程度かたどっていることがわかってくるかと思われる。つまり、従来言われてきたように、ホドニからニヨリ・ユエへの改修は唯単に文語的表現への置き換えではなく、その裏には口頭語の実態が秘められていたのである。

図二）



畢竟するに、図二）のように、原刊本から改修本にかけてのホドニの踏襲も、ホドニから非ホドニへの置き換えも所詮は口頭語史の反映ということになる。但し、非ホドニのタイプは当時のニヨッテをそのまま導入することに止まらなく、「口頭語から文語的表現へ」の改修という大原則に従って、一捻りした形、つまりニヨリとユエとして現れていたのである。

しかし、疑問は依然として残っている。非ホドニがニヨッテの捻られた形だとしたら、それはニヨリか若しくはユエの一方だけを採って現れてもよさそうなのに、というより、片方が自然であるのに、何故改修本には両形が用いられているのかがそれである。

その答えは、概ね二つのことから説明できそうである。まず考えられるのは、改修に携わった人が単数ではなく、複数であったと考えられていることである。ニヨリとユエの出現状況を巻毎に調べてみると、表四）のように、巻二・三にはユエしか現れていないのに対し、巻六ではユエは一例しかなくニヨリが一三例もと頻用されている。また、巻一・九はニヨリがユエの使用率の二倍にもなる。このことは、和語にするか漢語にするかなどの問題を含む日本語本文、音注の表記、また朝鮮語対訳文の表記などのあらゆる方面で見受けられる巻別の改修意識の差異などと同じく、複数だったろうと思われる改修者の意識の不統一によるものかも知れない。(12)

	ユエ	ニヨリ	ホドニ
巻一	6	12	25
巻二	7	0	11
巻三	4	0	25
巻四	2	3	15
巻五	5	7	22
巻六	1	13	7
巻七	5	2	16
巻八	10	8	15
巻九	5	10	6
巻十	4	0	0
計	49	55	142

若しくは、朝鮮語対訳の方からニヨリとユエの両立の問題を解きほぐすことが出来るかも知れない。改修本におけるニヨリとユエの（またホドニも）朝鮮語対訳の当て方はそれぞれ違う傾向を見せて

いるからである。これらには、例えば、

⑩明日より我々が始めませうホドニ、〔si-jak-hʌl-kə-si-ni〕（改、巻九、三）

⑪とかく我々が申した事で御座るユエ、〔sʌl-'on-mal-'i-ki-'yəi〕（改、巻九、三）

⑫館中も事淋しいニヨリ、〔館-中-to-sim-sim-hʌ-mai〕（改、巻九一六）

のような、三つの朝鮮語が対訳として付されている。この三者に係わる対訳朝鮮語を表にすると、表五）のようになる。

表五）

ボドニ	ニヨリ	ユエ	
142	49	13	「-ni」
0	3	32	名詞化語尾＋助詞
0	3	4	その他
142	55	49	計

表五）によると、ニヨリの場合は八九％に当たる四九例が「-ni」を採っており、全例「-ni」を採って現れているホドニに傾斜しているのに対し、それとは逆に、ユエの場合は「-ni」よりも「-ki-'yəi」と「-mai」の「名詞化語尾＋助詞」の対訳が当てられているのが二倍強である。朝鮮語対訳の面では、ユエがホドニの対極にあって、その間、ホドニ寄りの所にニヨリが位置するという形勢であって、ユエとニヨリが傾向を異にしていることがわかる。

尚、この「-ni」は当時原因を表す語尾として最もよく使われていたものであるが、[13]『捷解新語』においては偶然確定表現や単純接続の対訳としても用いられており、[14]因果性の薄くなっている一面も見せている。それに対して、「-ki-'yəi」と「-mai」の「名詞化語尾＋助詞」の場合は原因・理由の関係を強く表すものである。[15]

となると、ニヨリで結ばれる場合と、ユエによって結ばれる場合との間には、前件と後件の因果性に強弱の差が現れてくるかに思われる。しかし、この因果性の強弱というバロメーターをそのままニヨリとユエの相補的価値として認めて、改修本におけるニヨリとユエの両立の問題の答えとして援用し得るかどうかは問題である。勿論、その可能性は全く排除し得ないが、それよりは、ニヨリとユエの対訳が朝鮮資料全体を通して、パターン化してあることに注意すべきかと思われる。

おそらく、「故」という表記の類似に由来するものかと思われる、ユエ（故）イコール「-ko（故）-ro」、ひいては「-ki-'yəi」と「-mai」などの「名詞化語尾＋助詞」との等式概念と、また音相を同じくすることからニヨリ即ち「-ni」という先入観など、一種の固定した対訳意識が当時の人々にあって、その影響で改修本でのニヨリとユエの併用が行われたのではなかろうかと思われる。それは、『隣語大

方』『交隣須知』などにも綿々と受け継がれることからも推察できるが、改修本におけるニヨリとユエの併存は、日本語におけるニヨリとユエそれ自体の問題というより、朝鮮語の「-ni」はホドニかニヨリに訳すべきで、「-ki-'yei」と「-mai」などはユエに相応しいといった具合の対訳意識に因るものと思われる。

つまり、当時の口頭語のニヨッテを文語的表現へという改修方針の下で文章語化する際に、ある対訳意識が働いて、ニヨリとユエの併用が行われたと思われるが、このことについては、右記『隣語大方』などの他朝鮮資料の状況をも合わせて詳しく検討すべく、今後の課題にしたい。

四

以上、『捷解新語』における原因・理由の表現形式を検討した結果、次のことが言えるかと思われる。

原因・理由の表現形式の原刊本から改修本にかけての改修は、㋑ホドニの踏襲、㋺ホドニからユエへの置き換え、㋩ホドニからニヨリへの改めという三つの流れを採っている。

そのうち、㋑は上接語、呼応する後件文の内容、対訳朝鮮語から、助動詞ウ＋ホドニ、ホドニ＋命令・依頼文／「-r-ko-si-ni」の強い対応関係が認められるが、これらは口頭語史の反映と思われる。

㋑と対立する㋺、㋩も口頭語史においてのニヨッテの成長ぶりを忍ばせる節があり、「口頭語から文語的表現へ」という大原則のもとでニヨッテを文章語のニヨリ・ユエという捻った形で表したものと思われる。また、㋺と㋩の併存の理由は巻別分布や対訳朝鮮語に見られる偏りなどから求められそうであるが、詳しい検討の必要があり、今後の課題にしたい。

注

(1)『捷解新語文釈』の凡例

(2)以下、原刊本『捷解新語』（一六七六年刊）は原刊本、『改修捷解新語』（一七四八年刊）は改修本、『重刊改修捷解新語』（一七八一年刊）は重刊本とそれぞれ略称する。なお、本稿でいう『捷解新語』とはこれらを一括する名称である。

(3)本文は平仮名で表記されているが、便宜を図るため漢字仮名交じり文に直した。

(4)原因・理由の表現形式としてのテの数は、朴喜南氏の「『捷解新語』による敬語の構文論的研究—従属節の陳述性の関わりについて—」（『岡大国文論稿』一九）による。

『捷解新語』における、この接続助詞テの数を如何に解釈するかは甚だ難しそうである。大蔵流狂言台本やキリシタン資料などではテの数がさほど多くないからである。それぞれの資料の性格などをも考慮に入れて考える必要があると思われる。

尚、特に改修本になると、「～テ＋感情表現」というパターン化が認められる。

などの「～テ添なし」、「テ目出たし」、「～テ有難し」

○然様に仰せられましテ添なう御座れども、（改、巻九、三〇）

○是まで御渡りなされましテ、何より目出たう存じまする。（改、巻五、二七）

○御互いに御話を致しましテ、有難く存じまする。（改、巻七、二三）

この『捷解新語』における、原因・理由の表現形式のテと感情表現の密着については、別稿を期したい。

(5)濱田敦氏、「接続」（『国語国文』三七—四、後『朝鮮資料による日本語研究』所収）二九八～二九九頁参照。

(6) 原刊本には、
○尤も、参を以て、御礼申入るべき候えども、今朝より、気相悪しく候ユエ、其の儀無く候（原、巻十、六）
などの候文体の巻十に四例と、
○信使より頻りに止めさしらるユエ、太守船を押し寄せて（原、巻八、三一）
○真に仰しらる様に両国誠信のユエ、珍しい所を見物のみならず、此の様な接待に逢うて（原、巻八、二八）
のように、地の文（見方によっては、会話に挟み込まれた物語風の文とも見受けられる）と、改まった場面で畏まった口調を以て使われたものの二例がある。で、原刊本のユエも文章語、またはそれの特殊な現れとして受けとめてよかろう。

(7) ここで言う文語的表現とは、ロドリゲスの「書物には純粋にして典雅な言葉が含まれてゐる」（「日本大文典」「緒言」）と言うものであって、そういう言葉遣いは「話し言葉と書き言葉とを混合したものであって、誰にでも理解される」（同上、六六四頁）ものでもあり、それは「洗練された上品な会話に上達しよう」とする際に大いに役立つものである。言い換えれば、文章語的ではあるけれども、実生活での会話と乖離しているものではなく、規範性のある言葉として理解され、またある場面では使われていたものという意味としての文語的表現である。

(8) 後件文の意味内容の判断基準については、永野賢氏の「「から」と「ので」はどう違うか」（『国語国文学』昭和二七年二月号）を参考にした。

(9) 安田氏は、この現象は確定したものとして提示してもよい世界を「非已然」として朧化している「亜確定」の概念、つまり婉曲性に因るとされた（安田章氏、「練度」（『国語国文』六三―四）一二頁参照）。尚、注目する必要があるのは、「助動詞ウ＋ホドニ」の四一例のうち三六例（八八％）の対訳に用いられている、「-r-ka-si-ni」であろう。「助動詞ウ＋ホドニ」との強い関連性を暗示していると思われる、壬申倭乱（文禄慶長の役）以前の中期朝鮮語資料では余り例を見られない（辻星児氏、「原刊「捷解新語」の朝鮮語について」（『国語国文』四四―二）二一頁参照）とされる「-r-ka-si-ni」は、その形を分解すると「r（連体語尾、主として推量や意志の意味を持つ）＋kos（形式名詞、コト）＋i（指定詞、デアル）＋ni（接続語尾、ノデ）」であって、意味は「～だろうから」になり、「～だから」と確言してもよい事柄を婉曲に表現するものである。これも、安田氏の言われる「亜確定」としてのホドニの断面を呈していることになろうかと思う。

(10) 小林千草氏、「中世口語における原因・理由を表す条件句」（『国語学』九四）三七頁参照。

(11) 同上

(12) 新裕美氏、「『捷解新語』に於ける漢語―改修態度を中心として―」（『大友信一博士還暦記念辞書・外国資料による日本語研究』所収）、安田章氏、「捷解新語の改修本」（『国語国文』五六―三、後『外国資料と中世国語』所収）などを参照

(13) 李基文氏、『国語史概説』（改訂版）一六六頁参照

(14) 例えば、
○最前人を遣わしましたれば、彼方よりも御呼びなさるると申す事で御座る。（sa-lam-'wi-po-nai-'o-ni）（改、巻二、三五）
などがある。

(15) 前間恭作、『韓語通』一八二頁など参照

〔付記〕本稿は、一九九四年一月に提出した修士論文の一部をもとにした、同年六月五日の九州大学国語国文学会での発表を書き直したものである。